

いつとせを學び終りてやすらけし春の日なたに種蒔かむとす

照る波をまぶしみひとふなべりにまむかひ立てば言ふこともなき

かたくなの吾をなぐさむるひとの瞳とふとかちあひて心しびれぬ

爆音をつゝめる雲のすさまじき動きを透きて影をみとめぬ

刻々と生活へ及ぶたゝかひの餘波にそなへてつゝましき街

くりごとを言ひつゝのぼる坂道に雲のむらだち夕焼を見つ

空雷の止みし夕べの山頂にさやけく月の上りたるかも

救はるゝと云ふを信じて老若男女一堂に籠り祈れるをきく

所在なく部屋にこもれば玻璃越しに木の葉落して雨の來る見ゆ

定まらぬおもひなるから夜あらしの雨戸をたゝく音に夢みつ

散りしきる百來紅に射す光の粗きが儘に秋ならむとす

冷えびえと友の微笑が背に泌みる萩の花咲く細き野の道

木犀の香にたつ露路に踏入りてたゞならぬ巷の相をぞ見き

い身分の人でも。子を思ふ母親の愛には變

りがない。昔から今までに子供の爲に犠牲

となつた母は數限りなく多い。偉人も多く

は、母の偉大な獻身的の愛に感化されたの

であつて、近江聖人とまでいはれた中江藤

樹先生や孟子の母はこの好い例であらう。

一個の生物として生れ出てから、眞の人

間と成つて社會に出るまで、吾社會に出て

から後までも何事に依らず教を受け、世話

になるのは皆母である。その間母は子と喜

びを共にし、また如何なに悲しみ、苦しみ

も共にして、絶えず子の側にあつて教訓と

慈愛の光を子の上に投げて、一生涯死ぬま

海

長 崎 湛 長

それは尋常六年の時であつた。山國の眞

ん中に育つた僕は、それまで一度も海を見

俳句

二千六百春

君在す國土よ二千六百春
初刷や卷頭の殿下笑みおはす
機麗か今し降りくる落下傘
踏めば崩える崖のゆるみや露の薫
春風や車窓を離れぬ富士十里
病み上り跣にぬくき土親し
花散るや墓伏し拜むうしろより
麥刈の浮きつ沈みつ笠一つ
蠶飼ひする間に熟れすぎし麥なりし
麥打つや裸に笠の島男

田村孤雪

たことがなかつた。ところが、今度修學旅行で、日本海を見る事が出来るのだ。

僕等の胸は躍つて、春日山公園を指して山路をたどつた。「この頂上へ行けば、海が見えるぞ。」と、云ふ先生の聲に勵まされて急ぎ足に登つた。

道幅は、たしか一間位だと思つた。この春日山と云ふのは、さう大した山ではない昔、謙信の居城のあつたところだといふ。幾つか曲つた。僕等は相當疲れて來た。「佐渡が見るとよいがなあ。」と、先生が話しかけた。少し天氣が悪いと、佐渡は見えないさうだ。今日は幸に、良く晴れ渡つてはゐるが、春霞が四方を包んで、遠い山々はぼうつとしてゐる。「オーイ、頂上だぞおつ」突然先頭が叫んだ。みんなどおつと駈出した。上では大きな聲で、がや／＼叫んでゐる。海が見えるらしい。僕も息を切らして駈上つた。

頂上だ。バアツと邊りは展けて、非常に明るい。海だ。蒼青な海だ。其の時の氣持は、壯快といふより外、何とも云はれない

夏座敷月の影さす膳の上
月の路涼みがてらに送らるゝ
喜雨はれて廣葉のものが月にある
蚊遣香本に落ちたる蚊のものがく
すこやかに日焼のわれや休暇明
秋天のもとに裸や藪拓く
草の實のこまごまと露一つづゝ
落栗の濡れて色濃し草の中
木犀の香に文机の朝心
朝市に出す芋洗ふ月夜かな
地藏より路分れたり曼珠沙華
月の暈中にも侍る星一つ
故郷に寄る家も無き墓參かな
窓塞ぐ丝瓜すれがつ後の月
汗しとど熱の蒲團をかぶり臥す
開墾の野に出集ふて明治節
襟卷に笑める口もと包みけり

「成程廣いものだなあ、何と廣いんだらう」
遙か彼方に、ぼんやり横たふが佐渡ヶ島。
今その方に向つてゐるらしい船が、水平線
近く黒煙を吐いて、小さい影を浮べてゐる
無數の波が、洋々とどす黒い様な蒼色で、又
眞白くうねりを見せて、萬里の果までも續
いてゐる。眼下に見下す直江津の町。汽車
が白煙をはいて、港へと進む。港には大き
な船が一隻、途中に浮いてゐる。

地圖で見れば、向ふ岸までも見えさうな
この海が、佐渡でさへ見えぬ程なのには驚
く。尤も諏訪湖を眺めて、廣い湖だと思つ
て居る僕にとつては、無理もない事である
そればかりではない。それから二年後、二
見ヶ浦へ旅行した時である。海岸へ出た僕
は、眼前に大きな島が、薄ぼんやりと浮い
てゐるのを見た。その時、僕は「淡路島」
と叫んき笑はれた。「成程、よく考へて見れ
ば全然方が異ふ。馬鹿な事を言つたもの
だ。」と我乍らおかしくなつた。その島とい
ふのは、知多半島であつたのだ。

春日山を下りた、僕等は直江津の海岸へ

二つの詩

藤 澤 玄 唱

微 笑

沈黙の小池に石ころ一つ投げこんだら
ひとりぼつちの俺の様に

寂しく微笑みました

沈黙の小池

俺の友達

我 が 心

あはれなる我が心

宵闇にまたく星に似て

廣き宇宙の中で聲も出しえず

おし黙つて

いつの日も涙に曇る瞳で

冷たい自己をみつゝ

たど吐息つくのみ

出た。こゝで又大きな波を驚かされた。ド、と押寄せて、ザ、と引揚げる旋律に、暫し見とれた。僕等は一生懸命に、波に美しく洗はれた小石や、貝殻を集めて豫ねて用意して来た袋へ入れた。波に追はれて、尻餅をついた友達もあつた。

その日の夕刻、一同は鯨波へ着いてみた思ふ存分波と戯れて、僕等はホテルへ戻つて来た。折から水平線に沈みかけた太陽が邊り一面を夕焼の色に染めて、光を八方に放つてゐる。何とも言はれぬ美しさだ。漸く穏やかになつた波も、きら／＼夕日に輝いてゐる。と、僕等の視線にひよつこり黒いものが浮び上つた。「あつ鯨だ」。五六人が聲を揃えて叫んだ。又一匹。先生に聞いたらやつぱり鯨だといふ。形よく手入れをされた、松の木に囲まれて、この景色を興深く眺め入る僕等の顔も、夕日の色に映えてゐた。

をはり

